

阿武隈川水系をモデルとした
淡水魚の放射性セシウム汚染メカニズムの解明

環境放射能研究所 和田敏裕
難波謙二

【背景】

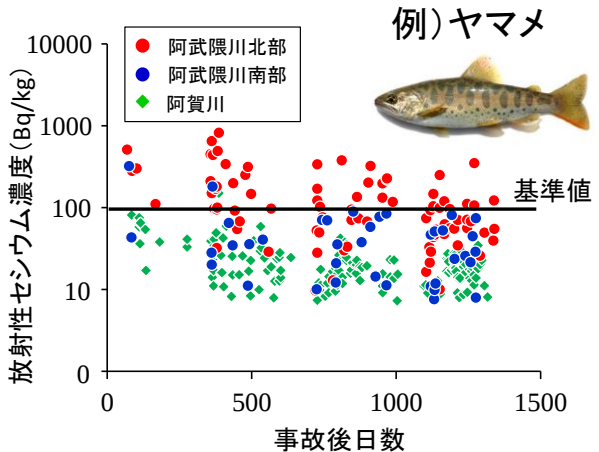
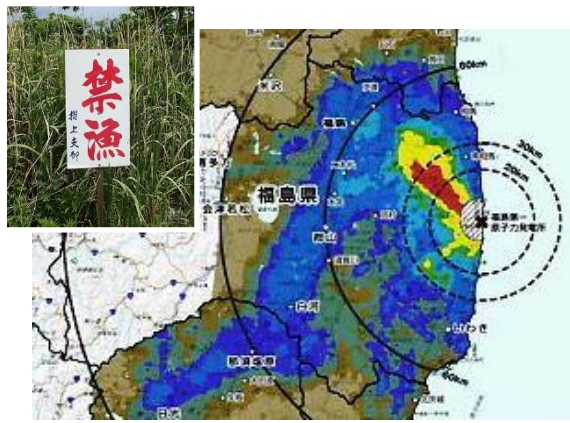


- 福島県の中心部を流れる1級河川
(延長 239 km、流域面積 5,390 km²)
- 自然環境、河川景観に優れ、
福島県民の社会・文化の基盤
- アユ釣りやコイ養殖業が盛ん



震災前、アユ釣りで賑わう摺上川
(福島市HPより)

原発事故による甚大な被害



- 流域全体が、原発事故直後に降下した 放射性セシウムにより汚染
- 特に、北部(福島市周辺)は影響が顕著(平成27年現在においても基準値越えが散見)
- 現在においても、アユ、コイ、ヤマメ、イワナ、ウナギ等が国の出荷制限措置
- 阿武隈川水系全域において漁業・遊漁が休止を余儀なくされている(平成27年7月現在)



阿武隈川漁協(左)と震災前の“阿武隈川塾”の様子(右)

- 漁業、遊漁を通じて河川を管理してきた
“阿武隈川漁業協同組合”
- 震災後は、漁業・遊漁及び学習塾の休止
- 漁業休止の長期化に伴う、
組合員数の減少や漁業者の高齢化が危惧

阿武隈川水系をモデルとした
「淡水魚の放射能汚染メカニズムの解明と将来予測」が急務

【内容と目的】

1. 阿武隈川の水域環境モニタリング

【目的】環境水中の放射性Cs（懸濁態・溶存態）の把握



2. 魚類の放射性セシウム・安定同位体比分析

【目的】食物網を介した淡水魚の放射性Cs汚染の解明（エサ、サイズ等）



統合

3. 非汚染アユの放流試験

【目的】非汚染アユ（年魚）を用いた放射性Cs蓄積プロセスの解明



4. 試験池におけるコイの放射性セシウム汚染防除試験

【目的】網生簀を用いた放射性Cs汚染防除技術開発（郡山市養鯉場）



環境モニタリングと実験生態学的手法を織り交ぜた多面的アプローチにより「淡水魚の放射性セシウム汚染メカニズムの解明」に迫る

【研究体制と成果】

福島大学環境放射能研究所



連携

連携

福島県内水面水産試験場



阿武隈川漁業協同組合



連携

foR-Aプロジェクトによる推進

「淡水魚の放射性セシウム汚染メカニズムの解明」と阿武隈川水系の安全・安心な漁業・遊漁再開へ貢献